カロリング期の司教カピトゥラリア　―その性格、射程、伝播―

アラン・ディルケンス
（丹下栄訳）

司教カピトゥラリア（同時代のテクストでは opusculum, capitulare, series capitorum など、かなり一般的な名で呼ばれている）とは、章に分けて記述された指令・規定で、カロリング期の司教が 800～950 年ころ、聖職者および（または）信徒にあてて出したものである。その内容は主として宗教的規律と教会組織に関わり、したがって根底では公会議の決定、贖罪早見表、ある種の司教書簡、さらには教会法集成に類似している。形式の点からすると、それは明らかに王のカピトゥラリアにかなり近い。しかし、その作成を命じた権威の性格（世俗権力か司教か）や条項が適用される地理的範囲（王国全域か司教区内か）の点で、それとは区別される。司教カピトゥラリアのテクストは、約 50 通が伝来している。そのうち何通かはそれを扱うにあたって史料批判、性格づけに関する問題をはらんでいるが、しかし全体としては、MGH の編者たちによってテクストの伝来（時として錯綜している）がもたらすさまざまな困難は解決されている。以下では、司教カピトゥラリアに関して未解決の問題がいくつか残されていることを、リエージュ司教ゲルバウドゥス Gerbaud とワルカウドゥス Walcaud のカピトゥラリアによって見ていくこととしよう。

司教カピトゥラリア作成のコンテクスト

一般的な理解では、司教カピトラリアは、「カロリング・ルネサンス」（キリスト教徒の民衆 populus Dei を「匡す」corrigere, emendare, renovare ことを、とりわけ教育を古代ローマ（と教父時代）のモデルにはっきりと回帰させ、さらに学識と権威 auctoriates への体系的依拠にめざす芸術的、文化的、道徳的、イデオロギー的改革によって行おうとする）の一環として作成された。人々はくり返し、司教カピトゥラリア capitula episcoporum が 789 年に発布された一般訓令、とりわけその第 70 章と関連していると指摘してきた。この視点からすると、伝統的理解によればゲルバウドゥスが 801・802 年ころ作成した（そうではないという説もあるが）テクストが最初の司教カピトゥラリアと目されているのは、驚くにはあたらない。このドキュメントはおそらく真の「カピトゥラリア」ではないと思われるが、その性質についてはあとでたち帰ることにする。

いずれにせよ、第 1 世代のカピトラリア（カール大帝治世の最後の約 10 年とルイ敬虔帝治世の最初の 10 年に成立）は、権力者の傍らに座してカロリング・ルネサンスを主導した、例えばオルレアンのテオドゥルフスやリエージュ司教ゲルバウドゥスとワルカウドゥスといった人物によって発せられた。司教はそれを司教区内の聖職者とその従者（または従者に直接）にあてて発布した。そこでは教会の階層組織、とりわけ十分の一税の徴収と利用、宗教的日常生活（洗礼、埋葬等々にかかわるもの）など、非常に多様な問題が扱われている。

司教カピトゥラリアはオリジナルでは伝わっていない（残っているのはコピーだけである）。そしてこの行政的ドキュメントは必然的に多数筆写され、さまざまな箇所に同時に送られたと論じられてきた。いくつかの手がかりによれば、それは例えば公会議の席上で関係者の前で声に出して読まれ、しかしときには書面で伝えられたと考えられる。いずれにせよ、そのコピーは司教座（あるいは大司教座）教会や在地の教会において、世俗行政および教会法に関わる規範を集めたドキュメント集成のなかで保管されることが多かった。

リエージュ司教ゲルバウドゥスとワルカウドゥスの司教カピトゥラリア

ゲルバウドゥスが出したとされるカピトゥラリアは 3 通、その後継者ワルカウドゥスのものは 1 通伝来している。カール大帝は治世の末期、アーヘンからほとんど動かなかったが、そこはリエージュ司教区に属している。彼は「自分の」司教であるゲルバウドゥス（809 年ころ死去）に対して、遺された司教カピトゥラリアと同時期、少なくとも 2 通の書簡を送っている。それらは、洗礼、聖職者の養成、代父と代母の義務に関する問題を扱っている。ワルカウドゥスについていえば、彼はカール大帝の「遺言」（811 年）に署名人の 1 人として姿を現し、少なくとも 825 年 8 月のアーヘン、829 年 6 月のマインツ公会議に出席している。

これら 4 通のテクストは P. ブロンマーの校訂による Capitula episcoporum（1984 年）の冒頭に置かれ、権威ある批判的刊本（Monumenta Germainiae Historica）の 1 冊として出版された。4 通はこの史料類型に関する方法論上のほとんどの問題を提起している。したがって私は、遺された 50 通ほどの司教カピトゥラリアの総合的叙述という不可能な試みを行うよりは、4 通をサンプルとして集中的に扱うことを選ぶ。それはまた、私が 1990 年に表明したいくつかの考えをアップ・トゥ・デートなものにするのに役立つであろう。

以下、2 人の司教カピトゥラリアの作成年代と伝来、ゲルバウドゥスの「第 1 カピトゥラリア」の位置づけをめぐる論争、これらのテクストの内容、ワルカウドゥスのカピトゥラリアが書かれたコンテクスト（多田哲と同様、私もそれをサン・テュベールのドキュメント集成と関連づける）、を順次検討しよう。

a. ゲルバウドゥスとワルカウドゥスの司教カピトゥラリアの日付と伝来

カピトゥラリア手稿の伝来を検討する時には、ゲルバウドゥスの「第 1 カピトゥラリア」（約 25 通のコピーによって知られている）、第 2 と第 3 カピトゥラリア（前者は 5 通、後者は 9 通、伝来数は少ないが、いずれもほとんど常に「第 1 カピトゥラリア」とともに伝来）、そしてワルカウドゥスのカピトゥラリア（内容はゲルバウドゥスのそれと密接に関連、しかし流布は現存するコピーが 2 通のみときわめて限定され、明らかに別個の論理にしたがっている）を別々に検討する必要がある。

1955 年に W. エックハルトは 4 通のカピトゥラリアがすべて含まれる「完全なファイル」を想定し、そこに収録されたドキュメントとその作成年代を同定した。これはゲラルドゥスの第 1 カピトゥラリアに関することがら以外は、広く承認され、特にブロンマーは彼の刊本でその説を採用している。それによると、このファイルには以下のドキュメントが含まれている。

①通例ゲルバウドゥスの作とされるテクスト（「第 1 カピトゥラリア」）。遺された手稿の中ほど、Haec sunt capitila ex divinorum scriptorum scriptis quae electi sacerdotes custudienta atque adimplenda censuerunt という語で始まる。801・802 年？

②カール大帝から司教ゲルバウドゥスへの書簡。クレドと我らが父についての認識、洗礼時の代父代母の義務を論じる。802～805 年（802 年？）。

③ゲルバウドゥスから司教区内の聖職者への書簡。カール大帝からの書簡の内容を告知し、すべての信者が使徒信教と主禱文を朗唱できるよう努めるよう厳命する。日付なし、さきの書簡に間を置かず書かれたと思われる。したがって 802～805 年（802 年？）。

④ゲルバウドゥスのコンドロ、ロンム、エズビィ、アルデンヌ各パグスの教区民にあてた書簡。彼らに宗教に関する皇帝の心使いに思いをいたさせ、使徒信教と主禱文を熟知することを厳命、洗礼に際しての代父と代母の役割に言及し、彼らによき業をなすことを忠告する。日付なし、さきの書簡と同時期に書かれたと思われる。したがって 802～805 年（802 年？）。

⑤ゲルバウドゥスの第 2 カピトゥラリア。リエージュ司教区の聖職者あて。使徒信教と主禱文の熟知、洗礼、誓約、宗教的祭日、十分の一税、迷信、聖職者集団の義務についてとくに言及。発布者の名前と日付なし。さきの 3 通の書簡と密接に関連（805 年？）。

⑥ゲルバウドゥスの第3カピトゥラリア。「第1カピトゥラリア」ですでに命じたことをくり返し、ほかのことがらを加える。発布者の名がないカピトゥラリア。第 2 カピトゥラリアの直後。

⑦カール大帝による司教ゲルバウドゥスあての書簡。三日祈願祭の断食と祈りを命令。807〜808 年ころ、またはより確からしいのは 805 年 11 月。

⑧ワルカウドゥスのカピトゥラリア。リエージュ司教区の聖職者に対する質問集のかたちをとり、彼らの典礼や祭具に関する知識と理解に増進をめざす。発布者の名と日付はないが、確実にワルカウドゥスのもの。必然的に、812 年にカール大帝がミラーノ大司教オディベルトゥスとトリーア大司教メッスのアマライウスにあてた洗礼に関する質問集（そのなかの文言がいくつか、カピトゥラリアにひき写されている）より後の作成。通常は 812〜814 年に作られた（より慎重な見方では 812〜831 年＝ワルカウドゥスの没年）とされるが、私は 1990 年に提示したように、むしろ 825 年に作成されたと考えている。

ワルカウドゥスのカピトゥラリア（それについては後述）を別にすると、この驚くべき集成（ゲルバウドゥス作とされるカピトゥラリア 3 通、カール大帝からゲルバウドゥスへの書簡 2 通、ゲルバウドゥスから彼の司教区の聖職者や信徒への書簡 3 通）は 2 つの手写本でのみ伝来している。1 つは、現在は失われてしまったが、それをベネディクト会修道士 E. マルテーヌ、U. デュラン両師がサン・テュベール修道院で実見し、大部分を 1733 年に Amplissima Collectio 第 7 巻に収録している。もう 1 つはベルリンの国立図書館に収蔵され（Preußischer Kunstbesitz, Lat. fol.626）、近年 H. モルデクは 12 世紀前半の筆写でリエージュ司教区内の一修道院に由来すると想定した。ベルリンの手写本はおそらくサン・テュベールにあったもののコピーであるが、後者もまた、ある原型を写したものと思われる。その原型は、司教座に保管されていた（あるいはそこで筆写された）ものにちがいなかろう。W. エックハルトは、この写本が 806 年 5 月にカール大帝の使者がリエージュを訪れたことと関係していると主張した。司教ゲルバウドゥスはそのとき、司教座の文書庫に保管されていたさまざまなドキュメント、特に彼の出した 3 通のカピトゥラリアとそれに関係する書簡、それに他のさまざまなカピトゥラリアや公会議の決定（それらはすべて 802 年 10 月〜806 年 3 月の日付を持っている）を再編（そして 1 つの書冊に筆写？）したというのである。この説は一定の正当さを持ち、広く受けいれられるところとなった。最近でも P. ブロンマーがこの説を採用している。これに従えば、ゲルバウドゥスが発布した 3 通のカピトゥラリアは、806 年以前に作成されたことになる。

b. ゲルバウドゥスの「第 1 カピトゥラリア」の性格をめぐる論争

近年論争の的となったのは、「第 1 カピトゥラリア」の性格をめぐる問題である。これについて、以下で瞥見しておこう。

実際、この作成者の名が記されていないテクストが持つ特異性は、十分な考慮を求めている。すでに見たように、その伝来は例外的である。この史料には 20 通以上のコピーが伝来しているが、第 2，3 のカピトゥラリアとともに伝来したものはごくわずかである。第 2・第 3 のカピトゥラリアにも作成者の名は記されていない。しかしそれらは、手稿の伝来、形式と内容の観点からすると、カール大帝による、ゲルバウドゥスあての書簡、ゲルバウドゥスから司教区の聖職者にあてた書簡（いずれも作成者、日付に関してなんの問題もない）と関連している。第 1 カピトゥラリアの初期の校

訂者は、1835 年に MGH を編纂したボレティウス以来、これをゲルバウドゥスの作とはせず、王のカピトゥラリアとしたり、司教会議の決議としたりしていた。この史料がゲルバウドゥスと関連しているという考えを復活させたのはまずもって W. エックハルトである。彼の主張は、ゲルバウドゥスの「カピトゥラリア」3 通と先ほど述べた書簡をまとめた、いまは失われたサン・テュベールのファイルが持つ、ドキュメント集成としての一貫性を論拠としている。とりわけ、カール大帝からゲルバウドゥスにあてた第 1 の書簡は、この点で「第 1 カピトゥラリア」に近しい関係にあり、このカピトゥラリアをアーヘン管轄の司教が書いたテクストと判断するのに都合がよい。さらにまた、「第 1 カピトゥラリア」と第 3 のカピトゥラリアとの類似性は、両者が同じ人物によって書かれたという考えをあと押しする。ブロンマンは彼が編纂した Capitula episcoporum でエックハルトの仮説を受けいれ、また多くの歴史家がそれに賛同した。私も 1990 年の論文では同じ立場を採っている。

近年になって、2005 年に R. ポコルニィは、MGH に含まれる Capitula episcoporum の編纂に終止符を打つとともに、「第 1 カピトゥラリア」の作者について再論し、それはゲルバウドゥスではなく、またテクストの性格も本当は司教カピトゥラリアには該当しないと主張した。彼によれば、「第 1 カピトゥラリア」と第 3 カピトゥラリアとの類似性は首肯しがたい。加えて、手稿の伝来状況は「第 1 カピトゥラリア」と第 2・第 3 カピトゥラリアの非常に緊密な類似性の間には、それらすべてを 1 つのまとまりとしてみることをあきらめさせるほどの不統一が認められる（例えば手稿それ自体における司教テクストの提示順序）。最後に、「第 1 カピトゥラリア」冒頭にある数語が、このテクストが 1 人の司教によってではなく、選ばれた（任地のある）司教 sacerdotes electi の集団によって発せられたことを示しているという事実は、ここに記された命令がカール大帝によって臨時に招集された会議（フォン・ヘルマンが 1913 年にアーヘン公会議について考えたような、一種の帝国集会 Reichsversammulung）の決定を焼き直したものであることを示している。つまり、「第 1 カピトゥラリア」は権力者によってまず作られたもので、したがって Capitularia regum Francorum の新版（準備中）においては、それが本来あるべき場所に戻されねばならない、というのである。

この二重に偶像破壊的な主張は、2007 年、オランダの女性歴史家 C. ファン・レインが著した、学位論文をもとにした書物で再検証の対象とされた。彼女は学位論文でカロリング期司教の指令書を扱い、9 世紀における司教の行動と司教教書の意味を解明しようとした。ポコルニィと同様、彼女も「第 1 カピトゥラリア」の作者はゲルバウドゥスではありえないと考えた。すなわち、「第 1 カピトゥラリア」と第 3 カピトゥラリアとの類似点はあまりにも一般的で、何通もの司教カピトゥラリアに共通するものである。さらに、1 人の司教が、数年という短期間のうちに同じ命令を 2 通の異なるカピトゥラリアでくり返すことは決してなかったのである。これに対して、ファン・レインは「第 1 カピトゥラリア」のテクストを内包する 3 つの手稿群に対して、先行する歴史家ほどには重要性を認めなかった。いまは失われたサン・テュベールの手稿をまったく斟酌せず（しかしそれはエックハルトの論を基礎づけるものであった）、彼女は第 1、第 3 群手稿のいくつかに見られる最初の数語（これはカピトゥラリア——Haec sunt capitula ...）。を無視できると信じた。彼女によれば、選ばれた修道士たち electi sacerdotes の同定に重きを置くことは無益で、カピトゥラリアの内容は、彼らは「教区の」聖職者で、個別の会議に招集された司教ではないことを明らかにしている。つまり、彼女は「第 1 カピトゥラリア」の性格それ自体については、真の司教カピトゥラリアと考える点でポコルニィと意見を異にしているのである。

この議論は、解決が望まれるすべての要素を提示していると、私には思われる。もしゲルバウドゥスが実際にテクストの作者ではありえない（それはしたがって彼の「最初の」司教カピトゥラリアではない）としても、かつてサン・テュベールに保管され、いまは失われたドキュメント集成のテクストは、ベルリンのものと同様、他に抜きんでる重要性を持っていると、依然として私は考え

ている。それゆえ、「第 1 カピトゥラリア」はゲルバウドゥスがリエージュ司教として参加することができた、ある宗教集会で作成されたと考えるのは理にかなっている。これらの「司教たちによって提示されたカピトゥラリア」capitula a sacerdotibus proposita は、ごく自然の成り行きとして、帝国の宗教生活に関する見直しの一環として、上述の集会直後に受けとったカール大帝の書簡と一緒に、おそらく集会の直接の成果となるドキュメントの中で保管された。つまりそれは厳密な意味での「王の」カピトゥラリアでも「司教の」カピトゥラリアでもない。それはまさに、選ばれた司教たち sacerdotes electi の、新しい、きわめて厳格な宗教政策の基本のあり方を考えることを優先課題とした会合（その構成は正確には判らない。司教と選ばれた聖職者だろうか？）の成果だったのである。

ここにおいて、なぜこのカピトゥラリアが例外的なほど広まったのか、なぜテクストの伝来がゲルバウドゥス（彼自身はまずもってリエージュの人間であった）の第 2・第 3 とは大きくかけ離れているのか、そしてなぜそれらが 806 年にリエージュ司教区の中心で作られたドキュメント集成に加えられ、サン・テュベールとベルリンの手稿に筆写されたのかを、同時に理解することができるのである。

c. リエージュに関わるテクストの内容

司教カピトゥラリアは、皆が思っていることだが、指令を発したり願望（さらには命令）を表明したりする、理念の勝ったテクストであり、実際の状況をつねに反映していると見なされるべきものでは決してない。したがってその各条項の検討は慎重になされねばならず、可能ならば、より確かな状況を記録している実践的テクストや記述史料、特に聖人伝と突きあわせる必要がある。さらに、司教カピトゥラリアを注意深く読むと、一般的な規定で他の類似のテクストにも見いだせるものと、ある司教の個人的関心や司教区の状況と結びついたより個別的な措置とを識別することができる。

こんなわけで、ゲルバウドゥスとワルカウドゥスのカピトゥラリアは「第 1 世代」のそれが持つイデオロギーの枠内にあり、9 世紀初めにおいて、教会組織とフランク王国住民の日常生活のなかにキリスト教信仰をよりよく浸透させるための強制的政策を強調している。しかしそれらはまた、ここで取りあげるべき独自の条項をも含んでいる。

これらのカピトゥラリアの要点は、秘蹟、典礼（とりわけ洗礼に関する典礼）皇帝と皇族のために唱えるべき祈りに関わっている。宗教上の祝祭日と神の礼拝については重要な地位が与えられている。そしてそれぞれの教会が持つべき礼拝の道具、典礼書などが詳細に規定される。すなわち聖体皿と聖杯、聖餐、読誦集、贖罪早見表、殉教録、詩編集、十字架、聖遺物箱（聖遺物に対して昼夜を分かたず気を配るべきことを力説しつつ）、聖職者の衣服、である。まったく同様に詳細に記されているのが、十分の一税の徴収に関することがらである。その徴収を委ねられた聖職者は十分の一税を収める人々の名を記したリストを持っている義務があり、証人の立会のもとで集まった税収入を分配した。リエージュ司教区では、そしてゲルバウドゥスの「第 1 カピトゥラリア」が提示している条項では、通常十分の一税は 3 分割された。3 分の 1 ずつそれぞれ教会の設備、貧者と巡礼、聖職者の生計に充当された。この教会に対する義務的納付が支払われなかった場合にとるべき措置を明言している。そしてこの義務の重要性は、サン・テュベールに保管されていた手稿にある Ansegise の集成でも、前面に押し出されている。

リエージュ司教のカピトゥラリアにおけるもう 1 つの力点（独自性はより低いが）は、聖職者に対して道徳律を遵守し、品格を持つようにという厳命である。すなわち、居酒屋に通うこと、何か問題が起こったとき誓いを立てたり保証人となったりすること、武器を取ること、女性に近づくこと、高利貸しを営むことを禁じ、またより日常的なところでは、酩酊、姦淫、等々を禁止している。

最後に、ゲルバウドゥスの第 2 カピトゥラリアは、魔術、腸卜、護符、木と石、等々に対して修道士たちが細心の注意を払って監視すること、疑わしい、または不吉と判断されることがらについては、判断する司教に知らせ判断を仰ぐことが望ましいとしている。

d. ワルカウドゥスのカピトゥラリアとサン･テュベール修道院ドキュメント集成のコンテクスト

ワルカウドゥスのカピトゥラリアは、ここまで論じてきた 2 つのドキュメント集成には含まれず、おそらく 806 年にリエージュで作られた原型にも含まれていなかったと思われる。それは２つの手稿、すなわち 10 世紀前半リエージュ司教区の修道院で作られたもの（ケルン、Erzboschofliche Diözesan - und Dombibliothek, 120）、9 世紀後半にロルシュ修道院で筆写されたもの（ローマ、Bibliotheca Apostolica Vaticana, Pal. Lat., 485）、によってのみ伝来しているが、そこにはゲルバウドゥスの第 2・第 3 カピトゥラリアも含まれている。

ゲルバウドゥスとワルカウドゥスのカピトゥラリアの手稿の伝来がそれぞれ独立していること、そしてここまでしばしば扱ってきた、いまは失われたサン・テュベールの手稿にワルカウドゥスのカピトゥラリア（しかしそれはゲルバウドゥスのそれを補完している）が含まれていなかった点は、たしかに考慮に値する。ゲルバウドゥスのテクストのほか、サン・テュベールの手稿は（マルテーヌとデュランの Amplissima collecto によってそれを知るのだが）多彩な規範的テクストを含み、そこから Anségise の集成が 825～827 年ころ編纂され、ベルリンの手稿はその集成に 825 年のパリ公会議の決定をつけ加えた。それゆえ、2 つの手稿（それだけがゲルバウドゥスが書いたテクストの完全な集成を伝来させている）が派生した原型が 824 年ころリエージュで、ゲルバウドゥスのテクスト集成（エックハルトの仮説に従うならば、806 年の直後に 1 つの集成にまとめられた）に他の規範的テクスト（ワルカウドゥスのカピトゥラリアは含まれていない）を付加して 825 年ころ成立したという想定が不可能となる。私は、その集成がワルカウドゥスによって 825 年 11 月に、聖フベルトゥスの遺骸がリエージュからアンダージュに奉遷された際に他の手稿とともに、アンダージュ、後にサン・テュベールと呼ばれるようになる修道院に与えられたと示唆した。この仮説は、ワルカウドゥスのカピトゥラリアは 825 年以降に作成されたことを含意している。そしてこのドキュメントがサン・テュベールの手稿に含まれていないことは、他の方法では説明不可能である。

ワルカウドゥスは、実際、サン・テュベール修道院の歴史においてキーパーソンの役を演じた。そして多田哲が指摘したように、彼のカピトゥラリアは司教が推進したキリスト教化の総合政策と不可分の関係にある。それゆえ私は、825 年ころのサン・テュベールの歴史を大筋のところでくり返すべきであると考える。

825 年は、アンダージュの修道院（9 世紀半ばには早くも、サン・テュベールの名を冠するようになる）の歴史にとって決定的な年であった。聖フベルトゥスの遺骸を奉じた厳粛な行列がリエージュから修道院へ到着したのはその時である。その発端には、なによりもまず、修道院の責任者（物質的「再建」の恩恵に浴したばかりの）と司教ワルカウドゥス（ルイ敬虔帝の宮廷と近い関係にあった）との利害の対立を見なくてはならない。皇帝とアニアヌのベネディクトゥスの出席のもとアーヘンで開かれた公会議は、帝国の宗教組織において従うべき生活様式を明言し、参事会モデル（アーヘン会則に従う）か修道院モデル（聖ベネディクト戒律に従う）かを選ぶよう強制した。その選択は、宗教共同体、特にそのなかでも最も古いものにとっては、つねにきわめて簡単とは限らなかった。アルデンヌの森の中にあるアンダージュにおいて、700 年ころ宮宰ピピン 2 世と妻プレクトゥルードによって王領地の圏内に創建された宗教共同体は、その地位について熟考する必要に直面した。そこでは創建以来修道院としての生活が行われていたが、ベネディクト戒律にはっきりとは（もはや）則っていなかった。それはしたがって、9 世紀には早くも参事会と形容され、後代の人々

は奇妙な時代錯誤を犯しつつも、律修参事会と呼ぶことをためらわなかった。825 年から間を置かずオルレアンのヨナスによって書かれた『聖フベルトゥス奉遷記』は、アンダージュでは修道士が集まらず、建物は崩壊し、規律は弛緩していたことを伝えている。司教ワルカウドゥスは、明らかにアルデンヌ出身であるが、彼がよく知っており、高く評価していたこの組織に、当時宮廷で語られていたモデルに副ってベネディクト戒律を導入させるよう心を砕いた。それゆえ、817 年 8 月 10 日に完了した「再建」において、アンダージュの修道院へはベネディクト戒律が導入されたのである。ワルカウドゥスは修道院の財産を確認し、追加の寄進をいくつか行い、建物の一部を再建させた。ワルカウドゥスが発給した新しいベネディクト会修道院の創設文書は失われた。しかし修道院年代記 Cantatorium Sancti Huberti（12 世紀のごく初期作成）には、その文書のかなりの部分が引用されている。他方ワルカウドゥスはアルトヴェウスを修道院長に任命したが、彼はとりわけ有能で、修道院管理者の助けを得て、すぐさま修道士（とりわけリエージュのサン・ランベール教会出身の）を従わせるようになった。

822 年、アンダージュの修道院長と修道士団はワルカウドゥスに対して、ここを崇敬の拠点として巡礼を呼びよせ、修道院に金銭的収入の増加をもたらすべく、最近再建された組織が精神と倫理において声望を博していることを強調しつつ、修道院教会に聖遺物を与える許可を求めた。聖遺物と司教区内の崇敬について熟知していたワルカウドゥスは時間稼ぎをした。アンダージュが求めた聖遺物は、727 年に死去してリエージュのサン・ピエール教会に葬られ、743 年に宮宰カールマンの臨席を得て祭壇に挙げられた、マーストリヒト司教フベルトゥスの遺骸全体という重要なものだった。この選択は、もちろん偶然ではありえず、おそらくワルカウドゥス自身の提案によるものだった。実際、司教はリエージュを司教区の最重要都市としており、聖ランベルトゥスのそばでかつての司教である他の聖人への崇敬が発展することは、彼にとって無益であった。フベルトゥスの遺骸をリエージュから遠ざけることは崇敬の競合を解消し、同時に、司教区の南端に位置する辺境で司教の存在を「マーキング」することを可能にしたのである。

825 年、ワルカウドゥスは階層性を重んじ、ケルン大司教ハデバルドゥスにフベルトゥスの遺骸をアンダージュに移す計画をうち明けた。そして二人はルイ敬虔帝にこれについての請願書を出すことに決めた。皇帝は 825 年 8 月のアーヘン公会議で、賛成の所見を付けてこの計画を提起した。必要な同意を取りそろえてワルカウドゥスはリエージュに戻り、アンダージュの修道士に決定を伝え、儀式を準備した。

825 年 9 月 21 日木曜日、フベルトゥスの遺骸は掘り起こされ、サン・ピエール教会から、リエージュのサン・ランベール教会（おそらく司教座になってからさほど経過していない）へ移された。リエージュからアンダージュへの奉遷まで、少なくとも 1 週間が経過している。『聖フベルトゥス奉遷記』は奉遷の日として 825 年 9 月 30 日と言う日付を記しているが、それが行列の出発日なのか、サン・テュベールへの到着日なのかは明らかにしていない（2 つの場所は約 80 キロメートル離れている）。アンダージュに到着すると、遺骸の検認が行われ、それが腐敗しないままとなっていることが認められた。この事実は、743 年に墓が開かれたときにすでに確かめられていたことだが、聖人に格別の地位を与え、また聖遺物の一部を取りさって他の場所に持っていく可能性を封じたため、アンダージュはフベルトゥス崇敬をほとんど独占することができた。聖遺物の到着の直接の成果は以下のようなものである。修道士団は司教ワルカウドゥスに、修道士と同様巡礼者にも読める聖人伝を供与することを求めた。第 1 の聖人伝は聖人の死からあまり日が経っていない時期、宮宰カールマンの命による遺骸の掘り起こしに際して、750 年ころ作られたが、「カロリング・ルネサンス」期の古典ラテン語能力の回復の後では、きわめて古くさいものに見えた。ワルカウドゥスはそれゆえ、友人であるオルレアン司教ヨナスに、新しい語学的要求に応えうるラテン語でメロヴィング期

の聖人伝を書きなおし、奉遷記（それはまだ何ら特別な神秘的事件を起こしていない、かつて司教であった一聖人への崇敬を在地に植えつけるのを可能にした）の記述によってそれを補完することを依頼した。この第 2 聖人伝（以後これには奉遷記が密接に結びついていた）に、9 世紀半ばに書かれた奇蹟伝がすぐに加えられた。8 つの奇蹟の最初のものは、フベルトゥスの遺骸がアンダージュに到着した 825 年に起こった。いつのまにか、奇蹟伝は第 2 聖人伝・奉遷記と結びついた。これらのカロリング期の奇蹟伝は、とりわけ G. デスピィ、丹下栄が示したように、サン・テュベール地域の経済史にとって注目すべき史料となった。奇蹟の 1（837 年とされる）は、奇蹟伝のより後代の版によると、バンクロワ、クロワ・バナルと呼ばれる、周辺村落の教区民が聖職者を先頭にアンダージュに毎年行進する行事の起源を明らかにしている。ところで、ワルカウドゥスのカピトゥラリアの 1 つの論点はまさに大プロセッション（聖歌を歌いながらの行進）に関わっており、これはしばしば、豊作祈願祭とクロワ・バナルの行進のことを言っていると考えられている。

ワルカウドゥスのドキュメント集成はそれゆえ、いくらか例外的やり方で、司教区の教会地帯で影響力を強化しようと願う司教の現場での行動、基本的なテクスト（ゲルバウドゥスのカピトゥラリア、それとともに、時として豪華な、アンダージュに与えられた書物）の流布と結びついた重要な行政活動、そして新しい指示（ワルカウドゥスのカピトゥラリア）の作成との構造的な補完関係を示していると言える。さらにまた、聖フベルトゥス第 1 奇蹟伝は、聖人崇敬（ここでは司教であった聖人）の効果、そして聖人の祝日に開かれる賑やかな市を修道院が独占的に支配していることを、活力にあふれたやり方で我々に思い起こさせる。

ワルカウドゥスのカピトゥラリアと司教区内の修道院を改革しようとする彼の意志とを関連づけると、カロリング帝国形成期における司教・修道院長の果たした政治的役割が完全に明らかとなるのである。

いくらかの結語

カロリング期司教カピトゥラリア集成の意義の 1 つは、800 年ころ「書かれたもの」を実用的なものとして使うことに特に留意した新しいタイプの行政ドキュメントが出現した点である。これらのカピトゥラリアは、教会（フランク王国における主要な公的組織の 1 つ）という組織においてコピーとして配置され、経営のための重要なドキュメントとなっていた。この司教カピトゥラリアと対をなす俗界のドキュメントが、伯の（公の）カピトゥラリアというような形態で存在したとはとても思えない。なぜか？答えはおそらく、教会世界における書記文化という特性のなかに求められるであろう。

さらにまた、MHG の編纂時になされた分析以来、そしてとくにガンスホーフの数多くの著作以来、歴史家はカロリング期カピトゥラリアに含まれる諸部門を識別し、その正しい性格を理解するに至ったが、そこで明らかとなったきわめて大きな多様性は、司教カピトゥラリアにおいてもいくらかの違いはあれ存在している。その多様性はまさに、カール大帝とその後継者の王国の持つ階層化された行政組織におけるこうしたドキュメントの地位、そしてそれらが寄せ集めの、しかし統一された手稿のなかに保存されたことの複合的な理由を歴史家が理解する鍵となるのである。